マイ・コーチ

～あなたを幸せに導く一番のコーチは
あなたの中で、目覚めるのをまっている～

幸せな成功を手にする５つの資質と
成功方程式の物語。

コーチ・セブンピース
谷口貴彦

これから始まる物語は、フィクションです。
しかし、私が触れてきた多くのクライアントや、私自身の断片的なシーンをつなぎ合わせて編集した物語です。
その、場面場面の一つ一つは実際にあった出来事もあります。
今、この本を手にとって頂いているあなたの物語と、どこか重なるシーンがあると思います。
そんな時、登場する主人公と一緒に感じ、考えていただけたら幸せです。
あなたの、アンテナに周波数を合わせる言葉がきっとあると信じています。
数え切れない多くの感謝とともに。

主な登場人物

岡本　和美　　４３歳

お菓子の食品メーカーで、販売企画に携わりながら、２人の子どもを育てるワーキングマザー。
ちょっと理屈っぽいところがあるが、何か頼まれると「いや」と言えず、ついつい何でも抱え込んでしまう自分を嫌っている。
東京下町生まれの２人兄弟の長女。
「私っていつも損な役ばかり」が口癖。
血液型はＡ型。タイプはサポーターアナライザー

岡本　真也　　４７歳

和美の夫。
住宅メーカーのセールスマネージャー
これまで、３度の転職をしながら、常に誰にも負けない実績を残してきた実力派。
完璧主義者で、営業では誰にも負けない自負をもっている。
しかし、どこか部下からは怖い印象を持たれていることに、自分は気づいていない。
夢を抱いて九州から上京してきて、大学の後輩の紹介で和美と知り合った。
「仕事はそんなに甘いものじゃない」が口癖の果実農家の三男。
血液型はＢ型。タイプはプロモーターコントローラー

岡本　由紀　　１５歳

初めての受験という波間にたたずむ、心が大きく揺れ動く中学３年生。

いろいろと押し寄せる感情や、未知という不安の森に迷い込みながら、この家族に大きなメッセージを投げかける。
正義感が強い反面、自分の責任感に押しつぶされそうになる。
推理小説が大好きで、将来は携帯小説家を夢見る。
血液型はA型。タイプはサポーター

岡本　誠　　１１歳

真也が大きな期待を寄せている岡本家の長男。真也の男はこうあるべき論に静かな抵抗を感じ始めた小学６年生。
勉強は中の上で世渡り上手、密かにプロのサッカー選手になることを夢見る。
岡本家の中では、独創的な発想でちょくちょく失敗をするけど、それが笑いを誘うキャラ。
場の空気を感じる天才で、痛いほど気遣いをする反面、最後は楽観的に考える強みを持っている
血液型はAB型。タイプはプロモーター

星野　雅彦　　４８歳

和美の会社に、最初は研修コーチとして関わるプロコーチ。
自分の人生の中で起きた大きなライフイベントがきっかけで、企業人からプロコーチの道を天職と決めて歩いてきた。
今回は、コーチング研修を通じて、人を活かす関わり方を伝える傍らで、和美のパーソナルコーチとして、和美が人生を大きくシフトしていく経験をサポートしていく。
独自の成功法則と原則をもって、和美のメンター（助言者）やコーチになりながら、和美の幸せな成功に向かってコーチングしていく。
「僕は世界ＮＯ２のコーチです。だってあなたにとっての一番のコーチは、あなたしかいないから」が口癖の熱血コーチ。
血液型はA型。タイプはプロモーター・サポーター

金子　元一　　５３歳
和美の勤める会社の営業統括部長。
今回、和美に成長のチャンスを届ける。

河合　晃一　　４３歳
商品開発部　開発主任
和美のプロジェクトに参加する影のキーマン。

室井　和正　　３５歳
営業部きっての実績を上げてきたトップセールスマン
和美が一番苦手とするタイプ

川本　勇介　　３２歳
マーケッティング部　主任
和美のプロジェクトチームを支える縁の下の力持ち

山口　和也　　２７歳
営業部
和美のチームのムードメーカー。

深井　さやか　２７歳

マーケティング部
山口と同期の頑張り屋。和美をひそかに自分のモデルにしている。

プロローグ

「岡本さん、ちょっといいかな」
「ハイ、何でしょうか？」
「話があるので、１０分後に下の会議室に来てもらえるかな」
「ハイ、１０分後ですね、わかりました。」

金子部長に急に呼び出されたのは、さくらの花びらがその輝きを失った４月をだいぶ過ぎた時だった。
女性たちの賑やかな人事異動の噂話もひと段落着いたころ、和美には特に大きな変化もなく今までと同じように仕事が動き出していた。

部長の呼びかけに不意打ちをくらって我に返った和美だった。
それまで目の前のパソコンの画面を見ていたはずなのに、その画像は和美の意識を通りすぎて、後ろの壁に当たって床に散らかっていた。

和美は手を止めて、ため息と一緒に、昨晩の由紀とのやり取りを思い出していた。
昨日、塾から帰ってきた由紀が、うっすらと化粧をしていたのを和美が問い詰めたのだ。

和美は、ただ、由紀を責め立てる言葉しか見つからなかった。
正論の傘の下でもっともらしい言い方に塗り替えた自分の感情をぶつけていた。
その和実の視線の先には、ただ唇をかみ締めて、何も言わないまま小さく震えて黙ることで、強く何かを主張している由紀がいた。

あの時は見えなかった。見ようとしなかった映像が、今は、はっきりと再現されていた。
最後は涙をこらえてキッとにらみ返した由紀の顔が。
由紀は何も言わなかった。声にだしては・・・
そう、声に出しては何も・・・言わなかった。
でも、射るようなメッセージは、今も和美の心に強く刺ささっていた。

少し冷静になれた今なら、この棘が何なのかが、なんとなくわかる気がしていた。
わかるといいながら、何か靄がかかっていた。
真実の輪郭が見えてきただけで、わかったことにして終わらせている自分がいることを和美は薄々知っていた。
何か、とっても大切なことのようなのに、でも昨日には戻れなかった。

こんな棘は、以前にも刺さったような記憶があった。
でも、時間に任せていつの間にか慣れという便利な言葉と置き換えてきた。

気づくと、子どもはいつの間にか１５歳になっていた。

そう、いつの間にか・・・

「由紀、あなたお化粧してるでしょう。一体どういうこと」
「どこで、買ったの？」
「そんなの買うためにお小遣い渡しているんじゃないのよ」
「いつからやっているの」
「他にも隠していること、あるんじゃないの」
「来年は受験でしょ、いい加減にしなさい」

「何とか言いなさい」

「・・・・・」

「もう勝手にしなさい、お母さんはどうなっても知らないから」

「・・・・」

バタンというドアを閉める音だけがこだました。
家庭という言葉からは、想像も出来ないほど心が凍える空気が降りてくるようだった。
温もりとか、温かみといった拠り所は、そこには微塵もなかった。

「なんで、私だけがこんな思いをしなくちゃいけないの？」
「私が何をしたって言うの？」
「誰も、私のことなんかわかってくれないじゃない」

答えの出ない自問が、和美の心を占領するのにさほど時間はかからなかった。
和美が、自分に問いかける言葉は、決して和美を救ってはくれなかった。
和美は、自分の問いかけが、自分に大きな影響を与えていることに気づいていなかった。

和美は、親の進めるままに東京の大学に通った。
小さいころから本を読むのが好きだった和美は、原文で英文学を読んでみたかった。
何度かの恋愛は人並みに経験した。大学を卒業して今の会社に就職して２年目の時に、大学の先輩に誘われて行った飲み会で、夫の真也に出会ったのだ。
何事もどんどん決めてくれる決断力があるのが真也の魅力だった。

それから1年を経て、お互いに無い何か違う価値に惹かれて結婚した。
当時２４歳で結婚するか、２５歳で結婚するかは、クリスマスケーキのセールに例えられて雲泥の差があった。
和美は２４歳の花嫁にこだわっていた。

和美は結婚して１８年になる。
仕事はけっこう好きで、家庭に埋もれるのを恐れるように仕事を続けた。
途中わずかな産休で職場を離れたが、今の会社でそれなりにがんばってきた。最近の言葉を借りればワーキングマザーという。
和美はこの言葉が嫌いだった。
和美は一言で片付けられないくらい、ずっといくつもの役を同時に演じてきた。

長女、姉、妻、母、娘、嫁、友達、保護者、部下、先輩、上司。

「私はひとりの人間で、ワーキングマザーじゃない。」

今も時々、和美を意味もなくただ辛さだけが襲う時がある。
しかし、振り返るには和美には時間がなかった。
気がつくといつも、時間の後ろ姿を追いかけていた。
舵を切ることを放棄した難破船のように、時の流れに流されていた。

そう、溺れないようにここまで来るのに精一杯だった。

選択

会議室に入ると、窓を背にして立っていた金子部長のシルエットだけが見えた。和美は金子部長の実力を高く評価していたが、どこか苦手意識を持っていた。
和美が感じる苦手意識が、金子部長との気持ちの距離間を遠ざけていた。

「忙しいところすまないね。実は、今度、A社と共同プロジェクトを組むことになった。」
「A社から、我が社の製品と食育をテーマにコラボレーションしたいといって来たんだ。」
「君もA社のことはよく知っていると思うし、教育の世界では知名度もある。」

「君にそのプロジェクトリーダーをやってもらいたいんだ。」

「君は、実際に仕事をしながら子育てもしてきた経験がある。それに、仕事での経験も豊富だし、後輩からも信頼されているしね。これは、君にとっても大きなチャンスだと思う。・・・・やってくれるね」

「え、私ですか、・・・私なんかで大丈夫でしょうか?」

和美は、いつも自分を過小評価するところがある。
それは、自分を守るには都合がよかった。
自分を認めることは、高い責任を負うことになると、これまでの経験で自然と身に付けていた。

「もちろん、私も出来るかぎりのサポートはさせてもらうよ。だから、何かあったらどんどん相談に来てくれ。」
「このプロジェクトは、今後の我が社の方向を決める重要な企画なんだ。君ならそれを任せられると思っているよ。」

「そこでなんだが、今度の土曜日、A社の担当者と最初の顔合わせも含めてミーティングを予定しているから出席してくれ。大丈

夫だよね」

「・・・今度の土曜日ですね。」
「わかりました」
「よかった。」
「では事前にA社が出してきた企画書に目を通しておいてくれないか、それで、金曜日に君の意見を聞かせてくれ。よろしく頼むよ。」
「期待しているからね」
「ハイ・・」

和美は、部長という職種は、一方的に話を押し切る才能がある人がつく仕事だと思った。
相談を持ちかける形で、上手く命令する。
「NO」というタイミングは、髪の毛の入る隙間もない。
でも、それを作り出しているのが、和美のこれまでの態度の積み重ねだとは気づかなかった。
人が人に見せる性格は、多くの中の一つの顔であって、それが全てではない。
相手が自分にどの顔を見せるかは、自分がそうさせている。
人はそれを相手のせいにしているだけだった。

さらに詳しく企画の全容を聞いていくうちに、和美は不安を伴いながらも、やっと認められたという自尊心をくすぐられていた。
金子部長に一礼をして、会議室を後にしながら和美は小さくガッツポーズを取った。
廊下の途中まできて、休憩室に立ち寄りコーヒーの販売機の前で、真也になんて言おうか考えていた。
和美は、一つ一つの自分のなにげない選択が、その先の物語を大きく変えていくことに気づいていなかった。
人は、人生の道のりで、数え切れないほどの選択を繰り返している。その主導権を握った時に何があるかは、まだ感じてはいなかった。

今度の土曜日は、特別保護者会だった。高校受験について3年の保護者に学校から最初の説明がある。